

# 芦屋弁慶

別名 四国落

シテ 武蔵坊弁慶

ツレ 尉

子 義経

ワキ 芦屋三郎光重

ワキツレ 従兵

狂言 舟子

所 摂津芦屋の里

立衆一声「漕出る舟の行衛や白波の。立居苦敷。浮身哉。

シテ「是は西塔の武蔵坊弁慶にて候。

サシ「扱も我君判官殿。科なき御身の情なくも。

立衆「落人とならせ給ひつゝ。大物の浦よりお船に召。

四国に渡り。伊予の河野を御頼み有べきとて。八島の浦迄船出せしに。悪風烈敷吹落て。御船あやうかりけるに。諸天の加護や有つらん。辛き命を扶りて。風静まれば夫よりも。暁方に艫を立

てく。漕行末の跡の波。足下共知らぬ海の上。焉く成覧夜深きに。遠島守の漁火の。ほの幽かにぞ見えにける。是を便りに舟子共。とある岸にぞ漕よする。く。

シテ詞「いかに申上候。難風を御凌ぎ有て。御着岸目出度御事にて候。又漁火のかげにて見候へば。老翁一人来り候。此者に所を尋申さふずるにて候。シカぐ

尉、サシ「すは遠寺の鐘の声。此磯近く聞え候。まだ夜深き

と。白浪の上にあや敷舟の見ゆる。あな怖ろしや。  
いざ歸らばやと思ひ候。

シテ詞  
「いかに尉殿。此浦は焉くの程にて候ぞ。御教へ候へ。」

尉  
「是は此所にて候。見馴申さぬ御事成が。此所を御尋候ぞや。此浦は。漁火の藻塩の煙風に消て。吹明したる荻の一村。」

シテ  
「是は不思議の答やな。其様賤き老翁の。一首の歌

を返答とす。覚束なしやいかならん。

義経  
「辞々是は謂あらん。げにく／＼思ひ出したり。詠ずる和歌の其中に。荻の一村と申社。荻に様々異名あり。」

尉  
「実能心得給ふ物かな。其浜荻は所がらにて。葭とも申蘆ともいふ。」

シテ詞  
「一村と読し心社。村と云は里の事。人里といふ事成べし。」

尉「もしほの煙風に消てと。詠ぜし心は何とく。

義経「夫は唯この海辺に。

詞「ことよせたらん歌の風情か。

尉「扱漁火の心はいかに。

シテ「実々いざりといふ事も。是も海辺の風情かや。

尉「否々是はさは非じ。古き歌にも漁火とは。

シテ「難波入江に。

尉「寄せられたり。

同「扱は津の国蘆の屋の。く。浦にやふねをよせつ

らん。難波の事も今ぞ知る。扱尉殿は此浦の人か

さもあらば。行方尋申さん。

尉「我はなど住家なしとやいふだすき。神の宮居は爰  
とても。猶住吉の浦の波。

同「帰る姿は遠近の。立木も知らぬ此尉が。

尉「老の浪間の明方に。

同「岸根の小舟。

尉「指寄せと。」

同「我は人間に非ずとよ。明神爰に来りつゝ。源氏を加護し申なり。濁らねばこそ神守る。我も其名は住吉と。かき消やうに失にけり。く。」

シテ「誠に有難き御告哉。先此所に御逗留有て。其後お船を出し申さふずるにて候。」

義経「尤にて候。シカぐ

トモ「いかに申上候。此所の国司芦屋の三郎。君を討奉

らんとて。大軍を以てよせ来ると申候。

シテ「言語道断の次第にて。去ながら何程の事の候べき。

さりながら御弓断有間敷候。其時弁慶陸を見れば。軍兵数多鉾さきを揃へ。よせ来る。こはそもいか成ものやらん。

ワキ「抑是は当国の住人。芦屋の三郎光重也。扱も義経落人と成給ひ。此所に来り給ふ社幸なれ。いそぎ討取て鎌倉殿へ参らせんと。三百余騎を引率し。

時の声をぞ揚にける。

同「其の時弁慶得たりやと。く。船より陸に飛上りて。長刀頓て取直し。弓手や馬手に切払ふ。さしものよせてもたちまちに。十七八騎切ふせられ。其外手負太刀を捨。半町計逃去て。重て近づく勢もなし。

同「其時光重是を見て。く。いで物見せん手なみのほどゝ。太刀拔持て進けり。弁慶長刀追取のべて。

互に龍虎の威を諍ひて。秘術を尽し。たゝかひしが。元来弁慶剛の者。さそくはきいつ。長刀とりのべ。畳み重て透間あらせず切払へば。さしもの光重きりたてられて。たゞよふ所を長刀とりのべ。車切に。かしこへ切ふせ。悦び勇みく。勝鬨作つて帰りけり。

